

# 知と行

鈴木大拙

(大谷大学名誉教授・文学博士)

## 1

今日の題は「知と行」というのでありますが、ある意味でいうちゅうと、昨日のお話（「キリスト教と仏教」・親鸞教学第八号掲載）の続きのようなものになるんでござす。題は大分違いますけれども、内容は続きのようなものなんですな。

それで、昨日申し上げましたキリスト教のことですが、キリスト教では *innocence* ということを言います。日本語で訳すると無心でありますけれども、キリスト教の人は、そういう無心という字は使わないので、あるいは無垢といいたほうが、天真爛漫とでもいいいますか。——ある意味ではまた、自然法爾ということになるかも知れませんが——。むかし、神が世界を造って、そうして、人間をそのなかに置いた。それを、エデンの楽園というふうに申しておりますが、そのエデンの楽園の生活状態というのは、子供のような生活状態であって、それを普通には *innocence* というんですが、何の罪もない無垢な、仏教的な言葉を使えば、無心とか無念とか申しましようか、そういう生活であった。そこへ蛇が出て来てリンゴの実を食べさせたらば、それからというものは、善悪が分って来た、とこう言うんですね。

そして、この *innocence* の生活が變つて、今度は *knowledge* 知<sup>ち</sup>というものが出て来た。これが善いとか、あれが悪いとか、よしあしの分る生活が始まった。よしあしが分つたら人間は悪いことをするようにできておりますか——よしあしが分つたからというて、悪くなるという理屈はないんだけれども——とにかく、その知<sup>ち</sup>が出て来たならば、それから人間が墮落をした。そして、いわゆる原罪<sup>げんざい</sup>なるものが出て来た、と。原罪<sup>げんざい</sup>というのは、ものの、元來の罪業と申しますか、英語でいえば *original sin* というのでしよう。

こうして、*knowledge* というものが出て来てから *original sin* という生活が始まって、すなわち、われわれの今日現在の生活は、その原罪を離れることができないものになった。今日生きているという、そのことがもう原罪である、ということになってしまった。その罪を贖<sup>あがな</sup>うために、神はキリストをわれわれのなかへ、また送り出されたということになるのですね。

## 2

ところで、これがですね。エデンを極楽にするとすると、極楽から娑婆<sup>さば</sup>が出て来たということになるんですね。あるいはまた、無心の世界からは、からの世界へ出て来た、ということに言ってもいい。ところが、仏教のほうじゃあ、そういうように、無心のところからは、からのいが出て来たということ——これじゃあまったく仏教の言葉になってしまふから、やっぱり英語をそのままに使いましょうや——この *innocence* と *knowledge* ということになって来るのだが、仏教のほうでは、悟りの、本覚の世界と、それから、無明の世界ということになる。これを、英語の訳にすれば *enlightenment* と *ignorance* といふことになるですね。それで、仏教のほうは、悟り<sup>ち</sup>ということと無明<sup>むめい</sup>ということになるし、キリスト教のほうでは、*innocence* といふことから *knowledge* と

うことになる。この knowledge というほうが、仏教の ignorance に当るのですね。

それで、キリスト教のほうで、善悪を知るという knowledge の出るということは、仏教では忽然念起というので、無明というものに当るすな。しかし、その点がもう大分、キリスト教の立て方と、仏教の立て方とは違う。ある意味でいうちゅうと、立場がまったく違うと言ってもいいですね。仏教のほうでは enlightenment とか ignorance とかいえば、知的な方面で、いわゆる epistemological ということになって来ますが、キリスト教のほうでいうちゅうと、こいつを moral のほうへとるといとか、倫理的な性格をもっておると、こう言うてもいいと思います。

### 3

ところがですね。キリスト教のほうのエデンの生活というのが、娑婆の、はからいの生活になったということが、なぜ悪いかですね。こいつが問題だな。

それで、その無心の世界が、むしろ、いま私がいおうとする行の世界です。動くもの、働くものの世界というてもいい。動物の世界というてもいいですね。ある意味でいうちゅうと、動物はみんな無心であり無我です。それを、人間が見るちゅうと、いかにも動物は我が強いようだが、動物自身の眼から見れば、人間が言うている我というようなものはない。お腹がすけば餌食を求め、自分の餌食を取ろうとするものがあれば、そいつをたおして自分のものにする。それは、動物そのものから見るちゅうと、悪いことも善いこともないわけですね。

ところが、人間になると、善いとか悪いとかいうことになり、これは他人のもの、これはわがもの、ということになって来て、そこに分けへだてをつけるから、いろんなはからいの世界が出て来て、面倒になって来る。そ

れが、動物の世界ではなにもかも無心です。例えば、獅子がお腹がすいたといって鹿を追いかけて、それをたおして食べてしまう、というようなことですね。それを、人間が見るといって、いかにも残酷なことのように見えますが、なんの、当り前のことですね。それが、ある意味でいうちゅうと、行の世界です。ただ働きというものがあるだけで、そこに、分別というものはちっともない。分別のない自然法爾の世界、あるがままの世界で、善いも悪いもなしです。

ですから、猫に対して「お前、隣りのお魚を盗んで来たな」といって叱りつけるというようなことは、なんの意味もないことですね。猫からみれば当り前のことなんだから、そいつを人間がやかましくいうのは妙だ、ということになるので、まあ、猫の世界から人間を見るちゅうと、人間はいかにも差別の世界に住んでおって、われよりも一段下だ、というようなふうに考えてもよからうと思うのですがなあ。それで、禅宗の坊さんには、仏様というか、菩薩の師匠は誰かという、猫や犬だというような話があるですね。自然のままというところからみれば、そのほうが本当かも知れん。それを私は、行の世界、とこう言うんです。

## 4

ところが、この行の世界は、無心の世界で無我の世界であるけれども、善悪が分るようになったことは、娑婆へ堕ちたのではなくして、娑婆へ生れ出たというか——人間には、そいつがどうしてもついて廻るので、その區別ができるということが、人間の人間たるところであるというのです。それを、知の世界と言いたいと思うのです。それで、行の世界と、知の世界と……。

それでは、人間のやるべき道筋はどこにあるかという、一ぺん行の世界から知の世界へ出たとするちゅうと

それから、もう一ぺん行の世界へ戻る。つまり、エデンの paradise lost ですな。paradise を一ぺんなくしてしまつて、この娑婆へ出たらば、paradise regained で、もう一ぺん paradise へ帰る。その帰るのは一ぺん娑婆を通じて paradise へ帰る、ということになるのであつて、ここに、大いなる違いがあるのです。これが大事なんです。それで、このことを申し上げてみたいと思うんですがなあ。

そこで、普通に自然法爾というふうなことになるちゅうと、なんでも我が儘勝手にやっていけばよい、と。ちやうど、猫が隣りのお魚をとるようなあんばいに、自分が欲しいと思うものがあつたら、手を出して持ってくればよい。自分のやりたいと思うことがあつたら、なんでもやればいいじゃないか、というようなことになつて、最近、アメリカで禅のことを言い出すようになってから、若い連中のなかには、なんでも出放第で、いままでの伝統的な、道徳的なものを、みんな破壊してしまつて、勝手放第にやるといふのがあつて、そいつをビート族という具合に言っておりますが、この beat-generation というものは、いま言つた自然法爾のはき違えをしておると言わなけりやなんのです。そいつは、知の世界を十分に通つて、その知の洗練を受けないで、直ちに行の世界へ入ろうということになつて、そこに、ひとつの錯覚があると言つていいんですな。

それで、この行の世界というのは、はからいのない世界であるから、そのはからいのない世界へ入るといふのが、最終の目的であるが、それを達するまでには、どうしても一ぺん知の世界を通らなきゃあならん。そして、この知の世界を通るといふことが、他の動物と違う、人間の dignity というか、人間の value というか、人間の人間たる所以の本当に出るところである。それで、われわれはこの世界を、自然の世界である、と言つてもよいのです。しかし、なぜそんなことになつておるんだ、ということとは、問うことを止めよ、だ。そういうことを問うから、問題が出て来るのであつて、とにかく自然の身で、そのままにやっていけば良いわけなんです。ところ

が、そうはいかんで、そこに、いろいろ紆余曲折が出て来る。

5

赤子の心持になるといっても——赤子の如くになれば極楽へ往けん、というようなことをキリスト教の人  
も言うし、また東洋のほうでも「大人は赤子の心を失わず」というようなことがあって、赤子のような無心な心  
を、道徳の聖人は失わんように努めていくというが、それは、知の世界、はからいの世界を通らずに、すぐ帰っ  
ていくのではなくしてですね。赤子から大人の世界を通って、その世界を通ったままで、赤子の心をもってお  
るというようなことになるんです。

そして、昨日も申し上げましたように、宗教の世界では、この知の世界に一ぺん死んでしまわんといかん、と  
いうことなんです。分別、計いというものを、一ぺん捨ててしまわなきゃならん。はからいというものがあって、  
人間の人間たる所以が成就したわけであるが、神の世界、エデンへ戻るには、それをまた一ぺん捨ててかからね  
ばならん。捨ててかかるといことは、そいつを忘れて、なんにもなくなってしまうて、元の木阿弥になって帰  
るという意味ではなくして、知をもっていながら、そのままにして、無心の世界へ帰るちゅうことになるですね。  
これを、大死一番という。

この死ぬということが、昨日申し上げましたように、キリスト教のほうでは、我をたてるからして、そいつを  
磔にして、一ぺん殺してしまわにゃあいかん。さもないというと、original sin というものが無くなってしまう  
ん、と。しかし、それが死んでしまつて、それで良いかちゅうと、もう一ぺん生き返らにゃあいかん。そこで、  
復活ということがキリスト教の信仰の中心になってくる。この死んでから生きるといことが大切で、アダムに

死してキリストに生きる、というような言葉もあるし、また、キャソリックのほうなどでは、第一のアダム、第二のアダムというようなことを言うんですね。知の世界の、エデンを追い出されたままの人を、第一のアダム、アダム第一世という。その第一のアダムが死んでもう一ぺん生れ変わってくるアダムを、第二のアダム、アダム第二世という。このように first Adam と second Adam というふうに分けて、そこに、われわれの精神的な訓練というか、鍛練というか、まあ、そういう進みゆく段階をつけておるようです。

それで、こういうことは、仏教の人の言うことからすれば、例えば、「生きながら、死人となりて、なりはてて、こころのままに、するわざぞよき」という、無難禪師という人の歌がありますが、この「生きながら死人となる」ということが大切なんだな。こいつが、第一世のアダムが、アダム第二世にならなきゃあならんということとで、それを、生きながら死ぬる、とこう言うんです。そうしたら「おもいのままに」で、勝手次第にやってよろしい。ちょうど、孔子が「七十にして心の欲するところに従って矩を踰えず」と言うようなあんばいに、いままで、一つや二つや三つの赤子から、七十になるまでのあいだの道を通って、「欲するところに従って矩を踰えず」となる。

beat generation のようなあんばいに、そいつを飛び越えないで、そいつを順々に一步一步踏んで行く。それをしてしないで、直ちにもとのエデンの生活へ帰ろうとするちゅうと、すべてが動物的になってしまふ。まあ赤裸々なところは面白いが、いまの道行がないんだから、人間の値打ちがなくなつて、動物的になってしまふのですね。ある意味でいえば、動物にかえるのも、人間になるのも同じかも知れんが、しかし、人間となる以上は、獅子が鹿をうち殺すのを見て、可哀想だということが、出て来なくちゃあならんですね。ですから「おもいのままに、するわざぞよき」ということの開けていくのは、七十まで、あるいは九十まで——親鸞聖人ならば九十——その

道行を、どうしても通って来なけりやあならんのです。

## 6

これがまた面白いのはですね。こういうことがまだあるんですよ。あの白隠禪師のちょっと前になるか、あるいは殆ど相い接触しておる時代に、盤珪和尚という人がおった。この人もなかなか偉い人だったのだが、この人の歌か、句かに、こういう言葉がある。「古桶の底抜けはてて、三界に一円相の輪あらばこそ」というんですね。「古桶の底抜けはてて」ちゅうのは、なんだかんだ言うているは、からいの世界、知の世界というものを捨ててしまつて、ちようど、この三界、この世界中に「一円相の輪」——なんというか、一つの円、輪を描くというところ、われわれはシンボライズするときには、円にしてみますが、その円には輪があるですよ——その輪さえもなくなつて、空<sup>とらとら</sup>滔滔<sup>とうとう</sup>というか、まったくの空の世界、絶対無の世界へ入ってしまったにやあならん、と言うんです。

そうするちゅうと、それで済んだように思うけれども、それは、否定の世界だけでなくして、否定が直ちに肯定に變つていく。それが「一円相の輪あらばこそ」ということを体験すると同時に、肯定の世界が出て来る。だから、否定の世界を描いておつても、わかる人を見ると、それは、否定に止まったものではなくして、否定そのままが、直ちに肯定になる。否定の裏が肯定だとか、肯定の裏が否定だとか、そういうことを言うんじゃない、否定そのものが肯定になつて来なくちゃならん、そういうことが分るんだな。

けれども、そいつが分らずに、ただ否定に止まつて、仏教は否定であるとか、大乘はなんでもかんでも否定する、というふうになるけれども、一べん否定の立場、三界に一円相の輪もない、というような境界に入るといふと、そこに、直ちに肯定の世界が出て来るのです。



今日も、西田君のことをいろいろと英語で書いた人の論文を読んでみておりましたが、道理とか理屈とかいうことになる、こいつはみんな客観性をもっておるのであるが、真理の秘境というものは、主観性、いわゆる「Truth is subjectivity.」というのを申しますが、truth は subjectivity つまり、内面から見なけりやあらん。外面から見る reason というようなものは、いちいちに、これがあって、こうなって、ああなって、というようなあんばいに筋道をたてて、時間のうえにそれを描き出すちゅうと、そういうものが客観世界に描かれ出されて、そのままあるものだ、というような考えになって、すべてが一種の宿命論的になってしまつて、なにもかも自由な創造の世界がなくなってしまうようであるが、これを引っくり返してですね、引っくり返すというともうすでに間違いであるが、まあ、引っくり返すというより外ないから、そういうとするとするちゅうと、そこには、自由自在な世界が開けてくるですね。

なにも、過去、現在、未来といううえに、ものがちゃんと決つていく、ということじゃなくしても、過去、現在、未来は、客観的に棒を引いて、これが現在、これが未来、というようなあんばいに、区画をするからなるので、その過去、現在、未来を生きていく、その人そのものになつてみるちゅうと、いかにも自由自在なものなんです。これが、すべての宗教の根本になるところのものであつて、これがなかったら、本当の宗教は生きていけない。

7

そこで、知というものが——知、知というちゅうと、いまのように客観的になるが——行にならなくちゃならん、こういうことです。それは、善悪も分らない、無茶苦茶な、動物的な行でなくてですね。エデンを出た know-

ledge の世界の洗練を受けて、一ぺんそれは、からいの世界を通して、それをうち破って、はじめてまた行の世界へ帰る。

「働くものから見るものへ」というような本を、西田君が書いたのですが、私は読んでみないから内容は——あんなもの読んでも、なかなかわかりませんわ、私は——それでもう、名だけで沢山だと思っているが、この「働くものから見るものへ」というのを、私は「見るものから働くものへ」と、反対に読んだらいい言うことなんです。

見るものは知ることなんで、見るというと、見るものと見られるものがあるが、見るものが見られるもので、見られるものが見るものになるちゅうと、働きそのものになるのだ、と。ですから、働きから見るというより、見るものから働きへということにとって、そこに、宗教生活の究極があるのじゃあないか、と言うてよからうと思うのです。そこで、盤珪和尚の「三界に一円相の輪あらばこそ」ということ、そこに、大肯定が感得されるのであって、これが、最も大事なことなんです。

ところが、『ダンマパダ』を読むというと、そのなかに“hymn of victory”というて、南方の人たちが、これは、お釈迦様が悟りを開かれたときに作られた歌だとして、大事にしていることがあるですね。それに「年来、自分は我というもの、この自分を造った造り主というものを認めて、それを探しておったけれども、なかなか分らなかったが、今度こそは捕えた。その造り主を捕えてみれば、もうすべてが……」と。あそこるところに——『ダンマパダ』の五一二か三か四かの二つ三つの句を“hymn of victory”と言うておるんですが——そのしまいのほうに、こういう言葉がある。visankharagatan という言葉がある。『法句経』の訳をいま覚えておりませんが、パーリ語のほうでは visankharagatan と、いうようになっております。これがですね、これが、

いわゆる、三界に一円相の輪もないという、空滔滔の境界を得て、それをうつしたものと、私は思っておるの  
であります。

それを、もう一ぺん言い直すというと、「心身脱落、脱落心身」ということを言う。道元禪師がシナへ行つて  
如浄禪師のもとで悟りを開いたとき、すべて、心も身もみな離れてしまったという、その徹底したところを「心  
身脱落、脱落心身」というた。それが、いまの盤珪和尚のいう「三界に一円相の輪あらばこそ」という、空滔滔  
の世界に入ったことである。それを、南方仏教の人は、その否定面ばかり見ておつて、否定でないところを忘れ  
ておるようでありますけれども、そうじゃあない。そこに、大肯定の面目が躍如として踊り出ていることに気が  
つかんときには、仏教は語るに足らんと、こう言うてもいいわけなんです。

8

そこから、自然法爾の世界が出て来るのである。それを、始めから子供のように……その、なんです、これ  
が難かしいんですね。これが難かしいんだ、自然法爾となると……まあ、親鸞聖人も自然法爾ということを言われ  
るが……この自然法爾ということ、こいつが、本能の——われわれの instinct そのままで動く、というような  
ことに取られてしまうんですがね——それも、ある意味でいうちゅうと、そういう点もあるけれども、しかし、  
いま言うように、はからいの世界を通じて来ない自然法爾は、もう地獄の世界へ堕ちるよりほかない、と私は言  
いますね。

知の世界、はからいの世界を、苦しみ苦しみ通つて来て「一元相の輪あらばこそ」というところへ出て、始め  
て大肯定の生活へ入るといふと、すべてが解決がついて、本当の自然法爾になる、と私は言いたいんです。そん

なことは理屈のうえからどうなるのか、というそいつは私には分らん。まあ、その方を研究していらっしゃる先生方に説明を願うこととして、私はもうそこへ来れば、話もなにも言う必要はなからうと思うですがなあ。しかし、こいつがはなはだうまい具合にいかんで、いろんな問題が出て来るんですなあ。

まあ、それはそうとして、この行というところから見ればですね。エデンの生活は行だけの生活ですが、それは、すこぶる美事なことであるに違いない。しかし、そこに忽然念起ということがあって、knowledge というものが出て来て、善惡の区別がつくというと、娑婆の苦しみがそこから始まる。それを、四苦八苦のちに切り抜けて、そしてまた、もとの行の世界へ帰って来ることができると、そこに、始めて往相廻向の結末がつく、と思うですね。

それは、一種の円みみたいなものです。行の世界から知の世界へ出て、あるいは、見るものの世界へ出て、その見るものの世界を通して、またそこで足を引っくり返して、もとの行の世界へ帰る。そうするちゅうと、いままでの行の世界は、単なる動物的な、アダム、イブ的な行の世界であったが、こんどは、豊富な知の経験を経て、それを抱いて行の世界へ入ったということになる。これを、もっと言い換えれば、もとは一つであったものが、knowledge の世界、無明の世界へ出て二つに分れ、よしあしというようなことを一ぺん通り越えて、また、もとの一つの世界へ帰る、と。

それで、「よしあしのなかを流るる清水かな」(仙厓作)ということをよく言うし、また「よしあしのなかにこそあれ夕涼み」(同)というようなことも言うですね。「よしあしのなか」というのは、葦のこをところによって、よしともあしとも言う。名が違うですね。そのよしあしで、同じ蘆というか葦というか、その蘆葦の世界をそのままにして、そのあいだを清水は流れる。だから、エデンを追われたと言うけれども、決して追われてはい

ないので、エデンをかついで、われわれは娑婆のまん中に活躍しているんだが、それに気がつかんだだけのことなんです。

9

それを、もう一つ真宗的な言葉を使うと、私はこういうことにしたいと思う。キリスト教で言うところの、エデンの生活というものは、光明の世界である。無量光、無碍光の世界である。極楽の光というものは、限界のない、無量無限の光で、また無碍の光である。無碍の光というのは影のない光です。人間の世界の光には影があるが、その影のない光、それで、碍げるものの無い光という。この無量光と無碍光、これで、エデンの生活を言い尽していると思います。

ところが、この無量光、無碍光のなかに生きているものに、忽然念起ということが起った。こいつが分らんです。どうして忽然念起というような現象が出て来たのかですね。これは、そういうことをいくら尋ねても、理屈でなんののかんのかのと言っけれども、畢竟は分らんというところに、分ったということがある、と言うよりほかかならうと思うです。それで、そんなことは馬鹿な話だ、ということになる。けれどもだな、そうなんだから、どうも仕様がない。

それはこうですわい。無量光で無碍光の世界におつたら、そのまま良いじゃないか、というところへ忽然として蛇が出て来て、リンゴの実を食べさせるといふ忽然念起ですね。それから、もうひとつ言えば——エデンの話は別にしても——神が一人おれば一人おるで、それで沢山なところを、神がひょっと「光あれよ」といふ煩惱を起したところに、この世界が出て来た、とこう言うてもいいですね。それで、神自身がエデンに対して責任を

持つことになるのだが、神が「光あれよ」という、「ひ」と言い出した時に、もう今日の世界が開けて来たということになる。どうしてこうなったかというと忽然念起ですね。忽然ということは、それに先立つものも、後から出て来るものもなしに忽然である。理論的な、継続的な、連続的なものないのを、忽然というんです。それをまた一念ともいう。また即刻ともいうな。それは、一足ふみ出した時に、ひょっと氣運が動いた時に、もうそれから大騒ぎだ。そういうことになるんで、もうそれは説明できないし、説明しなくてもいいことなんです。

## 10

此の間、ハワイでもその話をしていたんだが、あれは、私は面白<sup>わし</sup>と思うんですがね。スエーデンにペール・ラーゲルクヴィスト (Pär Lagerkvist) という人が、まだ生きておられるそうですが、私はその人の名もなにも知らなかったのですが、はじめて聞いたのは、いまから四・五年前でしたかな、忘れてしまいました<sup>わし</sup>が、その人がノーベル賞をもらったんですね。——ああいう賞をくれるとかなんとかいいうことは、つまらん話だけれどもですね。しかし、そういうことをやるので、誰も知らないものが知れてくるようになるから、まあ有難いことですね——この人は文学者ですが、小さな短編小説を沢山書いています。

ところが、いまお話を申し上げるものも、小さな五十枚ほどの長さの小説ですが、小説というか、説話というか、寓話というかですね。そのなかに神様の話が出て来ているんです。まあ、やはり順序をお話せんという具合が悪いだろうから、申しますと、死んだ後の世界ですね——この死んだ後の世界があるちゅうことも面白い。みんな誰でも死んだ後の世界をなにか考えている。われわれが不生不滅であるちゅうことは、そういうことを言うても言わなくても、本能的にみんなそう思っている。だから、どこへ行っても、地獄があるとか極楽があ

るとか、死後の世界とか、生れないさきとか、なんとかかんとか言うて、それを理屈で言わなくても、lifeそのものが、永遠性をもっているということを思っている。すなわち、われわれは有限の世界に生きているけれども無限そのものが有限の世界に、自分を限定して現わしておるところから、無限というものが、ひょっぴっと出て来るですね——とにかく、その死後の人びとがみんな集まって、ある時、話をしたというのです。

それはどうかというと、一体、どうして神様はあんな妙な世界を造ったのか。神様があんな不公平きわまる、不平等きわまる、苦しみばかりの世界を造ったということは、どうもわからんから、ひとつ神様のところへ行つて、聞いてみようじゃないか、という話です。それで、それはよからうということで、どこへ神様を訪ねて行ったのかわからんけれども、とにかく出立したと言うんです。どこへ、どのくらい歩いたら、神様のところへ達するかわからんけれども、とにかく出立したというわけだ。死んだ者がみんな出て来たとするちゅうと大変だが、そいつが出て来て、どこをどのくらい歩いたのか、space も time も分りゃしないが、とにかく、ある程度——人間だからまあ、ある程度と言うが——行くちゅうと、むこうの方に小さな火が見えて来た。それで、その火を目当にして行くと、そこに、老人が木を挽いておった、と言うんですね。これが面白いです。

それで、こいつは面白いとね。こいつは老人の樵のようだが、どうも様子が違う。こりゃ神様だろう。あそこへ行つて聞いてみようじゃあないか、というわけです。それじゃよしということ、先達みたいな者がいつて「貴方は神様ですか」と問いかけた。ところが、その人はべつに「はい」ともなんとも言わないで、なんだかきまり悪げにしておった、というですね。ところが、すべての様子から、どうもこりゃ神様にきまっておると——私の話はきわめてぞんざいだから、大分違っておるかも知れんけれども、大体は間違わんつもりだ——そこで、神様に、なぜこういう世界をこしらえたのか、と問うたら、神様は小さな声で「それは、私のできるだけの力を

尽してやった *best* で、もうこれ以上にはできないんだ」と言うて、またせつせと木を挽いておった、という話なんです。

それから、いくら尋ねても、あまり満足な返事がもらえんので、ぐづぐづしておったときに、子供が——子供も一緒に行ったとみえる。こりやまあ、大旅行ですな——始めはなんだか近づくにくそうにしていたが、慣れてくるちゅうと、自分のおじいさんのようになったか、頭のうえに乗ったり、肩へ手を出して髭をいじったりするような、親しい仲間になってしまった。それを、神様は喜んでおるようであり、子供もきゅきゅと言うて喜んでおる。それを見ておる母親もまた喜んでおる、という話が出てくるが、しかし、みんないつまでおっても、始末がつくようなつかんようなものだ、というので帰り出した。その帰り途中でいろいろと自分らの印象を話し合っておいたら、そのうちの老人が——この老人が出るのが面白いですね。やっぱり何だなあ、人間はちよつと年を取らんと駄目だぜ君……あまり若くてはやっぱりいかなあ——そこで、その年寄りがだね、こんな話をしたというんだ——この年寄りの様子を見てみると、いま死ぬというような様子は見えないで、まだこれから先が長くあるようなあんばいに見えたというんだ……ようがすかな、年寄りで、私<sup>わ</sup>らももう二、三年で死んでしまふだろうが、いまこうしているとところを見ると、まだ二、三年どころじゃない、いまから百年までも生きるような気がするですね。……まあ、そんなふうに、その年寄りの様子が見えたちゅうんです——その年寄りの曰くだ——これは、スエーデンの人の小説ですわな、それを英語にしたのだが、その英語の訳のままで読んでみるちゅうと面白いので、どうもそれを訳するちゅうと、なんだかまづくなるから、英語で申しましょうや——。

“I acknowledge you, dear life,” この *life* というのは、生命<sup>いのち</sup>というても、生活——生活というと、大分言葉が低くなつてしまいますが、それを、最も深い意味にとって *life* です。この *life* に *dear* という字をつけて



あるのが面白いですね。"I acknowledge you, dear life, as the one thing conceivable among all that is inconceivable."だ。

なにかも分らん、わかるものは一つもない、けれども、lifeよ、貴方だけがわかると、そう認めたい、そうだと申します、と。

11

それだから、私がこうして生きておる、ということがわかればだな、生きておるちゅうことになるというともうそれだけでわかる。そのほかに、なんで生きておるのかとか、これから先きどうなるのだとか、こうなるのだとか、そういうことはすべて incomprehensibleで、不可解だが、その不可解のなかに、生きておるという事だけがわかる。この生きておる事だけがわかるといふと、そいつが、働くものから見るものへとか、見るものから働くものへとか言うことも、なにもいらないので、忽然念起という事実を認めるだけでもう沢山だ。

これが、はなはだ面白い。これだけに徹底したことと言える人は、尋常一様の凡人ではなからうと思います。私はこの本をハワイの大学の図書館で読んだのですが、その後なんとか手を廻して買おうと思うけれども、どうしても見えないです。題名は、"Eternal Smile"で、「永遠の微笑」というんですがね。

ちようど、中宮寺か、広隆寺にある弥勒菩薩の、あの永遠の微笑ですね。あいつが面白いですね。どうもキリスト教では、smileということが、ちょっと出て来ないんですね。キリストの顔を見るちゅうと、大体、十字架上になくなったとか、あるいは、十字架をかついでおるとかですね。そのほかなにを見ても、この smile ということが、見えないような気がするです。

ところが、東洋の仏様には微笑がある——私がシナに行ったのは大分以前のこと、今日シナへ行って見て来たら面白いと思って、そういうことを念じていましたけれど、ついに機会がなかったが、あれは、たしか雲崗だと思っています。あそこに大きな石窟が沢山あって、そこに、仏様が彫り込んである。そのうちの大露仏の——今ではどうなっているのかなあ——写真を見たときに、ちょうど朝日が昇って来るような、いうにいわれぬ、堂々とした様子に見えた。ああいうような露仏だとか、弥勒の微笑といったようなものは、キリスト教のほうにはない。キリスト教のほうは、あまり真面目すぎるちゃうか、smileというと真面目でないように考えるのかも知れんけど、そうではなくして、一面いかにも頬笑んでよさそうな余裕のあるところが、東洋、ことに仏教にはあるような気がするですね。キリスト教のほうの人は、そんなことはないと言いかも知れませんが、どうも eternal smile というものがないような気がする。

## 12

それはまあ別問題だが、そういうようなところからみて、忽然念起ということ、そこにですね、極楽が無量光で無碍光の世界と、その無碍光の世界に——ただ無碍光の世界で、永遠の世界であるとするちゅうと、そこに、一々の分化というか、個化というか individualization というものが、みえんようなふうに考えられるが——沢山の、それぞれの個をおいている。それを、仏教のほうじゃあ莊嚴しょうげんと言っんです。莊嚴という字は、なにも飾るということではなくして、それぞれの分別したものを、一々個別化で particularize するとか individualize するとか、そういうような差別化したすがたを、莊嚴と言っんですね。私はそういうふうに解釈して、莊嚴という字を使っていますが、その個別化で、人人じんじんがその無量光、無碍光の光を体得して、しかも、ここに忽然と

して無明の——やっぱり、そこに闇というものがないかというと、一二三四とか、甲乙丙丁とか、太郎とか権兵衛とか何とかいうような、人の個別化というものができないです。

極楽でも、それぞれの莊嚴、すなわち、分化 Particularization ということが行なわれる。それが行なわれなけりゃあ、無量光ということも無碍光ということも言われませんね。それだから、限りの無いところに、限りの有るものが現われ、限りの有るところに、限りの無いものが働いておるということ、そう言うちゅうと、そういうものが二つあったり三つあったりして、互いに交錯するように考えるけれども、そうじゃあなくして、そうつが融通無碍に働いておる。その融通無碍に働いておるところに、仏教の根本精神というか、根本の原理がひそんでおると、私はそういうふうに考えるですね。

そうするちゅうと、われも他人もお互いに手を合せて、ナムアミダブツだな。そのナムアミダブツが、人びとのなかにひかっている無量光、無碍光を——私が君の無碍光を礼拝し、君が私の無碍光を礼拝するちゅうて——礼拝すると同時に、それを通して、それを融通無碍ならしめているところのものに帰依する、ということになる世界が出て来ると思うのですね。

それだから、この暗い娑婆が、そのまま無量光、無碍光の光に輝いておって、われわれはこうしてお互いに分らずにおるけれども、大信大行を獲た人になるちゅうと、その光は一々に光明を放つことになるだろうと思うですね。私は仏教のように広大無辺なところに眼を着けて、話をすすめる宗教はいんじゃないかと思う。こういうことが西洋の人びとに、もっともっと知られていなくちゃあならんと思うですね。それは、みなキリスト教徒が仏教者になれ、という意味じゃないんですね。ただお互いに知り合うところがなけりゃあならんと思います。

それで、華嚴の……あれが、重大な考えだと思えますが、仏様が菩提道場で悟りを開かれたときに、そこいらの山も川も數石も、ことごとく光を放つ寶石かなんかに変わってしまう。それだけじゃなくて、四方八方から仏様が一族を引きつれて出て来て、仏様が天地に一杯になって、それが、一々に仏の徳を称えると言うことです。あの世界を想像してみるとというと、無量光、無碍光というものが、光明赫々として、尽十方に限りなく輝いておると言うてよかろうと思うですね。そういう世界になるちゅうと、そして、この世界がそのままそれだ、というふうに見るところに、知<sup>ち</sup>から行<sup>ぎょう</sup>へ帰<sup>かへ</sup>ってくることができるだろうと思うです。

それで、ときどき、こういうことを考えることがあつたのですが、往相廻向<sup>わうじょうくわう</sup>ということがあつたですね。念仏して極樂へ往くというのが、その念仏することを大行<sup>だいぎょう</sup>という、と。ところが、私はこの大行<sup>だいぎょう</sup>という字は行<sup>ぎょう</sup>と同じ意味にとつて、念<sup>ねん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>する<sup>する</sup>ということは知<sup>ち</sup>ということになって、それから、大行<sup>だいぎょう</sup>ということになると、その知<sup>ち</sup>が行<sup>ぎょう</sup>になつてしまふ、と。すなわち、自分が南無阿弥陀仏そのものになる、ということが大行<sup>だいぎょう</sup>だと。念仏という、そういうものを向うにおいて、称えるということではなくして、南無阿弥陀仏そのものになることが大行<sup>だいぎょう</sup>である、という具合に見たいのです。そうするちゅうと、いろいろな解釈がくつついてるのが、分るような氣持がするんですが。

念仏の南無阿弥陀仏というところでは未だ至らん、その南無阿弥陀仏そのものになる。南無阿弥陀仏そのものになつて、お互いに南無阿弥陀仏の世界に入るといふと、お互いにおのおのの光明を、認めておる世界がそこにできあがる。それで、極樂へ往つても、極樂に止まるんじゃないくて、極樂へ往つたら直ちに還相廻向<sup>えんじやうくわう</sup>で、この世界へ歸つて来て、その信仰の証明をする。その証明をすることが、言い換えれば為人度生<sup>わにんとくせい</sup>というか、人のために働かなくちゃあならんということ、そこが、本当の宗教の生命のあるところであると考えます。

お互いにそういう点を、仏教者として、もっともっと研究しなくてはならん余地があるのではないか、という気がしてならないんです。そのことについては、もっと申し上げねばならんことが沢山あるんですが、これで、今日は御免を蒙ります。

（本稿は、昭和三十九年十一月五日、大谷大学における記念講演の筆録を古田紹欽先生に加筆訂正していただいたものである。  
なおこの講演が大谷大学における最後の講演となった。 文責 広瀬 泉）